

海軍艦艇の進水式と長崎

―「神事（くんち）以上の大騒ぎ」―

齋藤 義朗

はじめに

新造船に名前をつけ、初めて水上に浮かばせて新たな船の誕生を祝福する儀式が進水式¹である。進水には大きく二種類の方式がある。一つは、傾斜した船台上で建造された船が滑り下りて水面に浮かぶ船台進水（船尾進水）。二つ目が、ドック（船渠）内で建造し、注水して浮上させ曳船が船体をドック外へ曳き出すドック進水（浮上進水）である²。現在建造される大型船の大半はドック進水で、船台進水は少数派だが、壮観なのは前者である。大型のもので数万トンにも及ぶ「地球で一番大きな工業製品」³がわずか一分弱で水面上に滑り込む様はまさに「船が生まれる瞬間」であり、その場に立ち会った人ならば誰しも感動するであろう。

かつて日本海軍艦艇の進水式では、排水量五〇〇〇トンの巡洋艦以上の大型艦ともなると天皇の臨幸あるいは名代皇族の差遣があり、民間造船所においても海軍大臣、鎮守府司令長官、艦政本部長、主務部長や艤装員長、首席監督官などの参列を得て、商船以上に盛大な式典が催された⁴。

海軍艦艇の進水式は、すべて非公開と思われがちだが、戦時などの非常時、機密程度の高い艦を除いて、部外的一般個人・団体に式場での観覧が認められていた。海軍としては、進水式の部外公開を軍事宣傳普及策の一環と見なし、重要な広告塔に位置づけていた側面があったからである⁵。

進水式の最大の見せ場は、進水命令書の朗読による艦名付与の後、式台と船体とを繋ぐ支綱^{しこ}切断と同時に薬玉が開き、巨大な船体が動き

出して水面に浮かぶまでの一分間弱である⁶。式典全般を通じても半日で終わる日本海軍の進水式だが、呉海軍工廠を擁した広島県呉市や横須賀海軍工廠のあった神奈川県横須賀市では、大型艦進水式のたびに、市内人口の過半あるいはそれ以上の規模となる数万から一〇万人以上の観覧者が工廠周辺へ一挙に集まった。艦艇進水式は、造船工程中の一儀式にとどまらず、軍港都市全体を巻き込んだ臨時の大イベントとなっていたのである⁷。

このように、日本の各軍港や造船所を有する港湾都市では、大規模な軍事イベントとしての進水式が催されていたはずであるが、地域の視座でそれらを位置づける研究は乏しく、日本全国規模で比較分析するには各地の状況を個別に洗い出す必要がある。

そこで本稿では、横須賀海軍工廠や呉海軍工廠と並んで戦艦や巡洋艦など主力艦の建造を割り当てられた二大民間造船所の一角、三菱長崎造船所⁸を対象とし、『東洋日の出新聞』『長崎日日新聞』などの新聞紙面や海軍省『公文備考』などをもとに、明治から昭和戦前期にかけての進水式内容変化等を追うことで、海軍艦艇進水式における長崎の様相を明らかにしていきたい⁹。



【写真1】進水台を滑走する戦艦「日向」
大正6年1月27日 第1船台（齋藤蔵）

一 進水式観覧の概要

(一) 初期の艦艇進水式

三菱長崎造船所は、幕末の長崎鑛鉄所に由来する工部省長崎造船局を明治一七年(一八八四)に三菱会社が事業継承したことから始まる。同造船所は、明治以降の長崎における産業の中核として全長崎地方がこれに依存するかたちとなっており、外国貿易商社の具外移転、国内における長崎の貿易規模の相対的地位が漸次低下するなか、造船所の好不調は長崎経済の動向をそのまま示す関係にあった¹⁰。

三菱長崎造船所では、明治一七年から昭和二〇年(一九四五)の太平洋戦争敗戦までに約三〇〇隻の商船(一〇〇ト以上)と八一隻の日本海軍艦艇(一〇〇ト未満・未成艦も含む)を進水させている。このうち艦艇では、戦時下や秘匿性の高い四三例などを除いた約三〇例の進水式が公開されていた。

三菱長崎における日本海軍艦艇の建造・進水第一号は明治三九年(一九〇六)二月の三等駆逐艦「白露」(三八〇ト)であった¹¹。佐世保鎮守府司令長官ほか海軍関係者をはじめ、駐長崎アメリカ領事、市内銀行会社重役、新聞記者ら二〇〇名を来賓に迎えた進水式の模様については、次のような記事がある¹²。

駆逐艦白露の進水式は本日午前十時挙行莊田平五郎氏(三菱長崎造船所長……筆者補注)がギロツチンを切断せしに寒氣の為め艦底の油氷結して動かず、技師等手に手を代へて動かさんとするも其甲斐なし、斯くすること三十分遂に艦尾に綱を結び付け小蒸氣にて曳くこと十分余、是又何の甲斐なく一時は呉に於ける筑波の失策を再演せんかと来賓一同手に汗を握りしが、十時五十分無事進水したれば拍手鳴り止まざりき¹³。

冬場の寒さで船を滑り下ろす潤滑剤(ヘット・獣脂)が凍ってしま

い船は動かない。試行錯誤すること五〇分、曳船二隻を使ってようやく立神沖に浮かべた。この三ヵ月前の明治三八年(一九〇五)一二月、広島県の呉海軍工廠では皇太子嘉仁親王(のちの大正天皇)を迎えて一等巡洋艦「筑波」の進水式に取りかかったが進水台異常で中止、二週間後やり直しという不名誉な事例があった。三菱や海軍関係者らの脳裏には、「筑波」の件が浮かんたのであろう。来賓も冷や汗ものもの記念すべき進水式は四五分間にわたる格闘の末、どうにか拍手喝采で終えた。この失敗寸前の進水が影響したのか、同年中の駆逐艦進水式は、限られた来賓と関係者のみで進水式が済まされている¹⁴。



【写真2】進水する駆逐艦「濱風」 大正5年10月30日 (齋藤蔵)
この時の観衆のほとんどは、三菱長崎の職工たち。

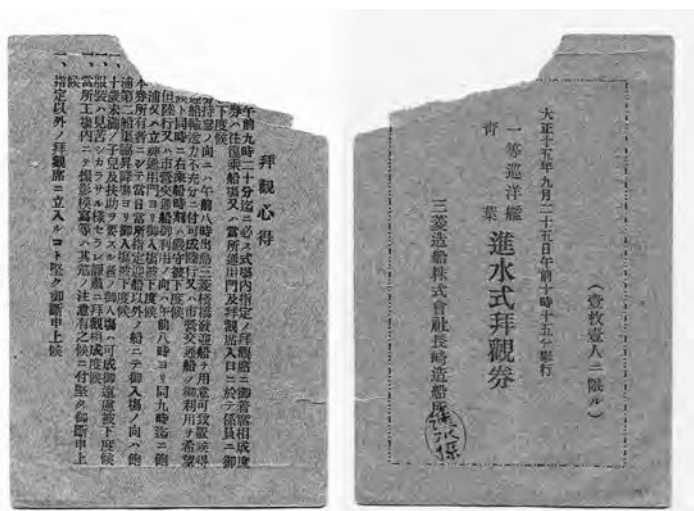
(二) 拝観券による部外者観覧の管理

三菱長崎における駆逐艦のような中小型艦艇の進水式では、部外者観覧は来賓のみ、多い時で一〇〇〇人ほどであった。この程度の規模では長崎市民一般に目立った反応は見られない。商船も含め多数の船が建造された長崎では、進水式は見慣れた日常の光景だったためである。

しかし、国を代表する巨艦、主力艦の進水式では式場の内外に万単位の観覧者が詰め掛けた。そうなるに人数調整、交通整理が不可欠となる。三菱長崎でも横須賀や呉などと同様に招待状・拝観券などを用いてこれを行った。

大正二年（一九一三）、神戸川崎造船所の巡洋戦艦「榛名」ととも

に民間造船所初の主力艦建造事例となった巡洋戦艦「霧島」進水式では、式場とその周辺の人口は当時の長崎市人口に匹敵する「無慮十四五万」でその人出と賑わいは「実に長崎市空前の盛儀」と表現された¹⁵。このとき三菱長崎が発行した招待状は「約四千の多数」に上っている。また、海軍軍縮を討議したワシントン会議が進むな



【写真3】一等巡洋艦「青葉」進水式拝観券（青券）（一部欠損）
大正15年9月25日（齋藤蔵）

か、「大軍艦建造の最後」と観覧希望者が殺到し、「観衆は約二十万」とも推計された大正一〇年（一九二一）の戦艦「土佐」進水式では、招待状のほか等級順に青・赤・樺色の当日拝観券を造船所が発行し、式場内における部外観覧者を管理していた¹⁷。

当時、長崎駅や中心市街地から式場の立神船台へ向かうには、陸路、稲佐橋を渡って迂回するよりも、海路、大波止・出島三菱棧橋発の専用汽艇で乗り付けるほうが遥かに便利であった。三菱長崎では上陸棧橋を券の種類で区分した。前出の戦艦「土佐」の場合、招待状所持者は「立神三菱棧橋」、青券は「立神第一船渠入り」、席等級が下位の赤・樺色券所持者は、立神から離れた「飽の浦第二船渠昇降場」という具合に複数の入出場路を確保していたのである。これも万単位の観覧者を定刻までに事故なく式場内へ誘導するための方策であった。

二 三菱長崎造船所における進水式の特徴

(一) 進水日は「くんち」以外

三菱長崎における艦艇進水式は、明治期の数例を除いて大半が午前中に最高潮位が来る大潮の日に催された。これは呉工廠も同様で、天皇名代として参列した皇族や海軍大臣らには式典終了後に県内視察など各種行事が組み込まれていた。一方、東京近隣の横須賀工廠は午後開催で、参列の天皇・皇族らは日帰りが通例であった¹⁸。

艦艇進水の日取り決定は、民間造船所の場合、駐在の海軍監督官を介した海軍大臣への進達を以て経て行われた。昭和六年（一九三一）に進水した一等巡洋艦「鳥海」では、「目下建造中ノ軍艦鳥海進水期日ハ潮時ノ都合上」として、同年四月五日午前九時一五分と決定している。進水期日は、工事進捗と「潮時」、つまり満潮時刻をもとにした設定であったことがわかる¹⁹。

なお、三菱長崎における艦艇進水式八一例のなかで、「長崎随一の

【表1】三菱長崎造船所のおもな進水式観覧者数（～昭和20年8月）

演舞飛行機数	艦名	排水量	差遣名代皇族等	進水日	六曜	進水時刻	所要時間	参観者数(人)	長崎市人口	参観者数典拠(新聞ほか)	備考
	一等水雷艇 白鷹	120ト		1899年(明治32)6.10	先勝				12万865		独シ-ヒヤウ社、組立
	二等水雷艇 第37号	82ト		1899年(明治32)5.10	仏滅						独シ-ヒヤウ社、組立
	二等水雷艇 第38号	82ト		1899年(明治32)5.22	仏滅						独シ-ヒヤウ型、組立
	三等駆逐艦 白露	381ト		1906年(明治39)2.12	先勝	10:55	45分	来賓200余・職工数千		東京朝日/東洋日出/鎮西日報	
	三等駆逐艦 白雪	381ト		1906年(明治39)5.19	大安	16:00			14万7461	鎮西日報	
	三等駆逐艦 白妙	381ト		1906年(明治39)7.30	大安	15:00					
	三等駆逐艦 水無月	381ト		1906年(明治39)11.5	先負	10:00		来賓招待なし		鎮西日報	
	三等駆逐艦 松風	381ト		1906年(明治39)12.23	赤口	13:00	2分	来賓招待なし		鎮西日報	
	貨客船 天洋丸	1万345ト		1907年(明治40)9.14	友引	11:30	5分	来賓600	14万8391	長崎日日/東京朝日/東洋日出	
	貨客船 地洋丸	1万3426ト		1907年(明治40)12.7	先勝	9:30		来賓400		東京朝日/東京朝日/東洋日出	
	通報艦 最上	1350ト	海軍大臣代理武官事務局長	1908年(明治41)3.25	赤口	13:00	30秒	来賓1000余/300余	14万9321	長崎日日/東京朝日/鎮西日報	
	義勇艦 さくら丸	3205ト	有栖川宮名代布目武官	1908年(明治41)6.7	先勝	12:00		来賓・参列700余		長崎日日/東京朝日	
	一等駆逐艦 山風	1030ト	侍從武官西神六郎	1911年(明治44)1.21	友引	11:30	50秒	来賓多数	15万2111	長崎日日/東京朝日	
	貨客船 春洋丸	1万3377ト		1911年(明治44)2.18	友引			来賓500		東洋日出	
	二等巡洋艦 矢矧	5000ト	竹田宮恒久王	1911年(明治44)10.3	先勝	16:20	1分10秒			長崎日日/東京朝日	
	中隊司令部艦 永豊	836ト		1912年(明治45)6.5	先負	10:30	1分	来賓数十、在留中華人30余	15万3041	長崎日日/長崎新聞	* 中華民國砲艦
	巡洋戦艦 霧島	2万7500ト	閑院宮戴仁親王	1913年(大正2)12.1	友引	10:25	1分58秒	7~8万/14~15万	15万3971	長崎日日/東京朝日/鎮西日報	
	二等駆逐艦 柏	665ト		1915年(大正4)2.14	先勝	8:00	30秒	来賓200	15万5831	東洋日出	
	二等駆逐艦 松	665ト		1915年(大正4)2.14	先勝	9:00	2分		15万5831	東洋日出	
	一等駆逐艦 濱風	1227ト		1916年(大正5)10.30	先勝	10:00	1分3秒	来賓のみ	15万6761	東洋日出	
	戦艦 日向	3万1260ト	東伏見宮依仁親王	1917年(大正6)1.27	大安	10:26	1分50秒	数万/5万	15万7691	長崎日日/東京朝日/九州日出	
	仏駆逐艦 第11号	675ト		1917年(大正6)6.9	大安	9:00			15万7691		* フランス海軍駆逐艦
	仏駆逐艦 第12号	675ト		1917年(大正6)8.5	大安	8:00			15万7691		* フランス海軍駆逐艦
	一等巡洋艦 澤風	1345ト		1919年(大正8)1.7	大安	11:00	35秒	来賓200外多数観覧	15万9554	長崎日日/東京朝日	
	二等巡洋艦 多摩	5100ト	東伏見宮依仁親王	1920年(大正9)2.10	友引	11:30	45秒	場の内外幾万		東京朝日/東洋日出	
	一等駆逐艦 矢風	1345ト		1920年(大正9)4.10	大安	10:55	40秒	来賓100余名		東洋日出	
	一等駆逐艦 羽風	1345ト		1920年(大正9)6.21	仏滅	11:00			17万7181		
	一等駆逐艦 秋風	1345ト		1920年(大正9)12.14	先負	10:00	30秒	来賓200外多数来観			
	二等巡洋艦 木曾	5100ト	* 奏請なし	1920年(大正9)12.14	先負	11:05	45秒			東京朝日	
	一等駆逐艦 夕風	1345ト		1921年(大正10)5.28	赤口	11:00	40秒		17万9688		
	戦艦 土佐	3万9900ト	伏見宮博恭王	1921年(大正10)12.18	赤口	10:30	1分	数万/5万/20万		東京朝日(大朝)/日本砲艦新聞/読売	
	二等巡洋艦 名取	5170ト	* 奏請なし	1922年(大正11)2.16	友引	11:00	1分	300余		東洋日出	
	一等駆逐艦 神風	1270ト		1922年(大正11)9.25	赤口	10:40	50秒	来賓はか職工等数千	18万2195	東洋日出	第1号駆逐艦
	一等駆逐艦 朝風	1270ト		1922年(大正11)12.8	大安	10:45	30秒				第3号駆逐艦
	潜水母艦 迅鯨	5160ト		1923年(大正12)5.4	先負	10:00		来賓200	18万4702	東洋日出	
	二等巡洋艦 川内	5195ト		1923年(大正12)10.30	大安	11:00				東京朝日/東洋日出	
	潜水母艦 長鯨	5160ト		1924年(大正13)3.24	友引	10:00		後部丘上にも人の山	18万7209	東洋日出	
	一等巡洋艦 古鷹	7100ト	伏見宮博恭王(佐親良弟)	1925年(大正14)2.25	仏滅	10:00	1分	参列者600	18万9716	長崎日日/東京朝日	
	一等巡洋艦 青葉	7100ト	高松宮宣仁親王	1926年(大正15)9.25	友引	10:15		(場内)1万余	19万2734	東京朝日/長崎新聞	
	一等巡洋艦 羽黑	1万ト	伏見宮博恭王	1928年(昭和3)3.24	仏滅	9:45		(場内)3万	19万8770	長崎日日	
	貨客船 浅間丸	1万6947ト		1928年(昭和3)10.30	先勝	9:00		来賓800/2万		長崎日日/東京朝日	のち海軍運送船
	貨客船 龍田丸	1万6975ト		1929年(昭和4)4.12	大安	9:35		来賓1000/2万	20万1788	長崎日日	のち海軍運送船
	一等巡洋艦 鳥海	9850ト	伏見宮博恭王	1931年(昭和6)4.5	先勝	9:15		(場内)3万	20万6437	長崎日日/東京朝日	
	二等巡洋艦 三隈	8500ト	伏見宮博恭王	1934年(昭和9)5.31	仏滅	9:15		(場内)数万	21万0952	長崎日日/東京朝日	
	貨客船 高砂丸	9315ト		1936年(昭和11)12.1	先負				21万7275	長崎日日	のち特設病院船
	二等巡洋艦 利根	8500ト	* 時局により奏請なし	1937年(昭和12)11.21	仏滅	10:25	2分	(場内)無慮2万	22万2473	長崎日日/東京朝日	
	二等巡洋艦 筑摩	8500ト		1938年(昭和13)3.19	先勝	10:00		(場内)2万~2万5千	24万2609	長崎日日/東京朝日	
	貨客船 あるぜん丸	1万2755ト		1938年(昭和13)12.9	先負	9:40		関係者多数列席		長崎日日/東京朝日	のち空母「海鷹」
	貨客船 新田丸	1万7150ト		1939年(昭和14)5.20	大安				25万0795	長崎日日	のち空母「沖鷹」
	貨客船 八幡丸	1万7128ト		1939年(昭和14)10.31	先負	10:00		関係者多数列席		長崎日日	のち空母「雲鷹」
	特務艦 樫野	1万360ト		1940年(昭和15)1.26	大安			非公開			運送艦(砲塔運搬艦)
	貨客船 春日丸	1万7130ト		1940年(昭和15)9.19	先勝	9:25			25万4676	長崎日日	のち空母「大鷹」
	戦艦 武蔵	6万4000ト	伏見宮博恭王(軍令部総長)	1940年(昭和15)11.1	大安	8:55	2分14秒	非公開/参列者30名程		三菱長崎造船所史(続篇)	
	特設航空母艦 单勝(福原丸)	2万7500ト		1941年(昭和16)6.26	先勝			非公開	25万9928		もと貨客船「福原丸」
	一等駆逐艦 照月	2701ト		1941年(昭和16)11.21	赤口			非公開			
	一等駆逐艦 涼月	2701ト		1942年(昭和17)3.4	赤口			非公開			
	運送艦 足摺	8400ト		1942年(昭和17)5.16	大安			非公開	26万5180		揮発油運搬艦
	一等駆逐艦 新月	2701ト		1942年(昭和17)6.29	友引			非公開			
	一等駆逐艦 若月	2701ト		1942年(昭和17)11.24	先勝			非公開			
	運送艦 塩屋	8400ト		1943年(昭和18)3.8	仏滅			非公開			揮発油運搬艦
	一等駆逐艦 霜月	2701ト		1943年(昭和18)4.7	大安			非公開	27万0432		
	航空母艦 天城	1万7460ト	久邇宮朝融王	1943年(昭和18)10.15	先勝			非公開			
	航空母艦 笠置	1万7150ト		1944年(昭和19)10.19	大安			非公開	24万0000		未成艦
	海防艦(丁型) 第8号	900ト		1944年(昭和19)1.11	先負	8:40		参列者約百数十名	24万0000		
	海防艦(丁型) 29隻		第10,18,20,22,24,26,28,30,32,42,44,52,54,64,66,74,76,82,84,102,104,186,190,192,194,196,198,200,202号								
	海防艦(丁型) 第204号	900ト		1944年(昭和20)4.14	大安				15万3212		

出典:長崎市人口は、『長崎市制六十五年史』(長崎市役所、1956年)より

は参考データ、海軍発注ではない船舶。

行事」「天下三大祭の一」と紹介された諏訪神社の例大祭における「くんち」の三日間（一〇月七から九日）に行われた進水式は一例も見えない。「くんち」について大正九年（一九二〇）の『長崎遊覧之栞』（長崎市役所編）では、「市民はこの祭のためには財を投じ産を傾けることをも意としない」と解説している。全市を挙げての賑わいの日に進水式を設定すれば、来賓の予定や交通手段、宿泊施設などの確保ができず困難が生じるであろう。何より艦の進水を祝う儀式自体が「くんち」の歓喜に呑み込まれてしまう可能性も高い。長崎では、「くんち」の三日間に艦艇進水式が割り込む余地などなかったものと考えられる。

（二）外国人来賓への公開

三菱長崎の進水式場内には、駐在外国領事や商社、ミッション・スクールの校長など、多いときで三〇名以上の外国人来賓の姿があった。来賓中の外国人数、参列頻度はともに横須賀や呉工廠よりも多く、異国情緒溢れる国際都市長崎を象徴する光景であったといえる【表2】。こうした外国人による進水式観覧も、「海軍観覧規程」（大正一二年二月一九日、官房機密第二〇二号）に則って行われた。外国人が観覧できるのは、軍機・軍極秘・極秘・秘のいずれにも該当しない機密程度「第四類」の物件に限られ、所属長官の決裁が必要であった（規程第八条）。さらに海軍に関係する民間工場・造船所観覧の場合、所管の海軍監督長（首席監督官）を経て海軍大臣へ届出を出すこととなっていた²³。なお、外国人による観覧の様子については後日の参考とするため所属長官を経て海軍大臣へ報告することが原則とされており（第一四条）、進水前の戦艦「土佐」建造中、米国大使館付海軍武官の一行が三菱長崎を見学した際、「土佐」の艦体には近づけさせなかった事例が引用されている²⁴。

【表2】巡洋艦「三隈」進水式招待外国人（昭和9年5.31進水）

職名	住所 (領事館・会社所在地)	国籍	氏名
1 中華民國領事	長崎市大浦町2	中華民國	柳汝祥夫妻
2 英国領事	長崎市大浦町6	英国	エフ・シー・グレート レックス夫妻
3 米国領事	長崎市大浦町5	米国	シー・オー・スパイ マー夫妻
4 仏国代理領事 (白国名誉領事)	長崎市松枝町42	仏国	ゼー・ヴァシエ
5 諸威名誉領事 葡萄牙名誉領事 英国副領事 (ホームリンガー商会員)	長崎市大浦町6	英国	エス・エー・リンガー 夫妻
6 瑞典名誉領事 英国副領事 (ホームリンガー商会員)	長崎市大浦町6	英国	エフ・イー・イー・リ ンガー夫妻
7 ホームリンガー商会員	長崎市大浦町6	英国	エム・シー・アダムス ゼー・エー・エリクセ ン夫妻
8 大北電信長崎支店長	長崎市梅香崎町	丁抹	ジョセフ・ケール
9 海星中学校長	長崎市東山手町1	仏国	アンナ・ローラー・ホ ワイト
10 活水女学校長	長崎市東山手町13	米国	エッチ・ディー・ブカ ナン夫妻
11 ロイド司検員	長崎市大浦町9	英国	エッチ・ゼー・コックス
12 ロイド司検員	神戸市明石町32	英国	ゼー・カスパー
13 ズルツァーブラザーズ 神戸工業事務所長	神戸市神戸区京町72	瑞西	イー・プレヒリン ガー
14 ズルツァーブラザーズ 技師	(注)文品試運転立会ノ 為来所中)	瑞西	ダブリュー・ビツゼ ガー
15 ズルツァーブラザーズ 技師	(注)文品試運転立会ノ 為来所中)	瑞西	エッチ・バルツェー
16 ズルツァーブラザーズ 技師	(注)文品試運転立会ノ 為来所中)	瑞西	エッチ・バルツェー
17 三菱石油株式会社副社長	東京市麹町区丸ノ内 2-6	米国	ディー・ディー・マッ クグレゴア

出典：JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C05023460600、公文備考 昭和9年 D 外事 巻6（防衛省防衛研究所）

冒頭で触れたように、進水式本来の儀礼的意味とは別に、海軍は艦艇の進水式公開を軍事宣伝普及の一環と位置づけていた。一方、三菱長崎のような民間造船所にとって進水式での新艦お披露目は、新規受注獲得に向けた広報の好機でもあった。

さらに大型艦艇の進水では天皇の臨幸あるいは名代皇族の差遣があった。昭和一二年（一九三七）の二等巡洋艦「利根」進水における皇族差遣奏請検討の際に「従来此ノ種軍艦進水ノ際ハ横須賀ニ於テハ陛下ノ行幸ヲ、其ノ他ニ於テハ皇族ノ御差遣ヲ仰ギ居リタル」と振り返っているように、天皇の行幸は東京近隣の横須賀工廠が多く、その他の工廠・造船所では名代皇族の差遣が行われた²⁵。進水式への皇族臨席は、その造船所の艦艇建造への信頼性や品質に（お墨付き）が付与されたとも受け取れよう。そのような点で進水式への皇族差遣は造船

【表3-1】スペイン風邪 長崎県・全国患者・死者数調査表（第2波）
（大正8年8月～大正9年7月）

時期	長崎県		全国		備考
	患者数(人)	死者数(人)	患者数(人)	死者数(人)	
初発から大正8年12月まで(～T9.1.15)	10,598	202	179,565	5,102	長崎県は2波初発:大正8年12月上旬～9年1月15日までの集計
大正9年(1920)1月	37,740	1,301	1,332,713	55,096	大正9年1月16～31日集計
大正9年(1920)2月	16,736	950	581,816	38,485	
大正9年(1920)3月	3,583	170	159,370	17,302	
大正9年(1920)4月	558	41	79,768	8,555	
大正9年(1920)5月	260	7	72,434	2,742	
大正9年(1920)6月	15	1	5,150	346	
大正9年(1920)7月	—	—	1,281	38	「—」は該当なし
合計(第2波)	69,490	2,672	2,412,097	127,666	

出典:「流行性感冒患者死者数調査表 自大正8年9月至大正9年7月 内務省衛生局調べ」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C08021632900(第32-35画像)、大正9年公文備考 卷69 人事4 止 医事1(「防衛省防衛研究所」) および「流行性感冒」(内務省衛生局編、1927年)をもとに作成。

【表3-2】スペイン風邪 第1～3波 長崎県・全国患者数・死者数

流行時期	長崎県		全国	
	患者数(人)	死者数(人)	患者数(人)	死者数(人)
(第1波) 大正7年8月～8年7月流行	28万2629	3289	2116万8398	25万7363
(第2波) 大正8年8月～9年7月流行	6万9490	2672	241万2097	127万6666
(第3波) 大正9年8月～10年7月流行	8741	199	22万4178	3698
合計(1～3波)	36万860	6160	2380万4673	38万8727

出典:「流行性感冒患者死者数調査表 自大正8年9月至大正9年7月 内務省衛生局調べ」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C08021632900(第32-35画像)、大正9年公文備考 卷69 人事4 止 医事1(「防衛省防衛研究所」) および「流行性感冒」(内務省衛生局編、1927年)をもとに作成。

【表4】スペイン風邪罹患者 入院者・死者数状況(飽の浦三菱病院)

報告日	入院患者(人)	死者(人)		死者数採録期間	
		職工	家族	7日間	1/20～1/26
大正9年1月27日	739	4	14	7日間	1/20～1/26
大正9年1月30日	726	1	9	3日間	1/27～1/29
大正9年2月3日	736	1	7	3日間	1/30～2/1
大正9年2月6日	626	1	10	4日間	2/2～2/5

出典:「飽ノ浦病院取扱患者数ニ係ル件」[長崎造船所衛生状態報告]JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C08021548600(第14-16画像)、大正9年公文備考 卷17 儀制9 止(「防衛省防衛研究所」)。「飽ノ浦病院流感ニ係ル件」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C08021632900(第4画像)、大正9年公文備考 卷69 人事4 止 医事1(「防衛省防衛研究所」)より作成。

は半ば強行された印象もあるが、皇族臨席への障害解消に向けた三菱長崎の動きには、式典の成功がもたらす効果とそこに寄せられた期待の大きさを窺うことができる。

所にとって特別な(榮譽)であった。ところが、大正六年度(一九一七)の八四艦隊計画における五五〇〇トン型軽巡洋艦として建造された「多摩」の大正九年二月に予定された進水式では、長崎への皇族差遣が危惧される事態が発生した。大正七年(一九一八)から一〇年にかけて猛威をふるい全国で約三九万人もの死者を出した流行性感冒、スペイン風邪の第二波の流行である。

「多摩」進水式への皇族差遣は、大正九年一月一六日には内定の旨が宮内書記官から海軍省軍務局に伝えられていた²⁶。しかし長崎県内では、大正八年末(一九一九)から九年一月中のスペイン風邪流行(第

二波)で一五〇〇人に上る死者が発生しており【表3-1】、大正四年(一九一五)に上西山町へ移転開館した県立長崎図書館では一月二六日から翌月四日まで「流行性感冒の為に休館」していた²⁷。三菱長崎では、宮内省からの現地衛生状態確認があることを予測し、同造船所の飽の浦病院におけるスペイン風邪患者数、死者数状況を一月二七日から週二回の割合で海軍艦政本部へ報告した。このなかで「病勢少シク減退ノ傾アリ」と改善の兆しがあることを伝えている【表4】²⁸。海軍省は佐世保鎮守府の軍医官派遣と長崎県担当部局との協議による「防疫上遺憾ナキ様配慮」をした上で長崎に東伏見宮依仁親王を迎えることとした³⁰。防疫策の詳細は不明ながら、二月一〇日、「多摩」進

水式は三菱長崎第一船台を中心に「幾万」もの観覧者注視のなか無事挙行されている。後日、内務省がまとめた統計結果を見る限り、当時の流行状況は、現在の感覚では催事決行にふさわしいとはとても思えないが、進水後の船台には次の建造予定も控えていた。「多摩」進水

三 進水式当日の長崎

(一) 進水式に伴う長崎への観覧者等の流入

長崎市の人口にも匹敵するような万単位の進水式観覧者には、長崎市在住者だけでなく、「前夜に掛け地方より入込んだ拝観人」が多数含まれており、「近郷近在」からの流入層には「老幼男女」の割合も高かったようである。³¹ 大正二年の巡洋戦艦「霧島」進水式では、大村の歩兵第四六連隊に入営する新兵見送りのため郡部から長崎駅へ出てそのまま一泊し、翌朝の進水式に出掛ける者が続出した。³² 三菱長崎初建造の戦艦として大正六年に進水した戦艦「日向」の時には、式典のため休業の三菱長崎職工らが、家族だけでなく「遠き親戚等は態々手紙にて呼び寄せ」ていた。そのようなわけで特に職工らが多く居住する稲佐・飽の浦・水の浦・立神方面は、前夜から「神事（くんち）以上の大騒ぎ」、長崎市内では「下宿屋などは満員札止」となっていた。³³

式典には来賓として全国から海軍関係者、官僚、実業家や学者なども多数長崎入りした。受け入れ側の三菱長崎は、市内有名旅館を手配し、担当者はその宿割りに忙殺された。「日向」進水式前夜の長崎市内の様子について『東洋日の出新聞』は、「殊に昨夜は迎陽亭、富貴楼、藤屋本店、鹿島屋にて造船所側からの招待宴が催ふされたので芸妓は箱止、其他大波止辺の飲食店等も水兵連で大繁盛」で、「進水式のために市中の潤ふた事も非常なもの」と報じている。³⁴ これは昭和に至っても変わりなく、来賓一〇名の宿割りが発表された昭和六年四月五日の一等巡洋艦「鳥海」進水の折にも「此処長崎の四、五両日は諸星顕官の往来で大混雑を呈する筈」との記事がある。³⁵ 大艦の進水式を控えた長崎市内は、前夜から異例の大混雑、盛り上がりを見せていたのである。

(二) 進水式場構内の様子

進水式の当日、招待状・拝観券を所持する観覧者は海路・陸路で式場入りし、開式前の場内は、「式場付近一帯全く立錐の余地なき」状態となっていた。³⁶ 構内の配置は、艦首正面に置かれた式台上座として、進水する艦の左右には勅任官や陸海軍将校、一般、新聞記者、陸海軍下士卒、三菱工業学校（のち職工学校）、在郷軍人会、各学校生徒、造船所員・職工ら向けの拝観席がそれぞれ設定されていた【図1】。当初、観覧対象に含められていた学校は長崎医専や長崎高等商業などの高等教育機関であったが、大正六年の戦艦「日向」進水式では、式場近隣の立神、稲佐、飽浦の各小学校児童も式場内観覧を許可された。以後の進水式場内観覧では、中学校生徒や海洋少年団、一般小学校児童など低年齢層への拡がりが確認できる。³⁷ 来賓一三〇〇人、「無慮五万有余」の人数となった「日向」進水式は、東伏見宮依仁親王臨席のもと挙行された。当日午前一〇時、式場参列員が着席し、依仁親王が宿所の占勝閣から式場への移動を開始すると、港内在泊の海軍艦艇は一斉に二一発の皇礼砲



【写真4】戦艦「土佐」進水式における式台および来賓
大正10年12月18日第1船台（齋藤蔵）

を放ち、各艦乗員の登舷礼における「奉賀」の発声は港内に勇ましく響きわたった。場内の観覧者も「肅然たらしむるが中に勇壯の氣に満たしめたり」という独特の雰囲気の中式の開始を待ち構えていた。式典では、進水命令書の朗読が行われ、造船所長の銀斧一閃による支綱切断から約四分が経過して徐々に艦は動き始め、軍楽隊の奏楽とともに五〇秒をかけて艦体は無事海面上へと滑り込んだ。進水成功の間、喜びに沸く式場内の様子を『東洋日の出新聞』は、「歓呼喝采の声は汽笛の響と共に痛快を感じしめ、見る人知ると知らざるとの別ちなく莞爾として互に見事なる進水を祝し合ひたる」と伝えている。⁴⁰

(三) 式場入りできなかった観覧者の動き

三菱長崎では、船台を囲む進水式場内に収容できた人数は、多く見積もって三万人であった【表1】。では、拝観券を入手できなかったその他大勢の観覧者はどのようにして進水式を見たのであろうか。

式場となった三菱長崎造船所の第一・第二船台などがある立神地区は、挿鉢状の地形の底に位置するため、船台の周囲、対岸の高台などからも見下ろすことができた【図2】。そのため拝観券のない人々は、先を争って条件の良い観覧場所の確保に奔走した。

①立神・鮑の浦・水の浦・稲佐方面

まず場外観覧席として早くから注目されたのが、船台の後背・西方に位置する立神から西泊にかけての丘陵一帯(現・西立神町)であった。明治四四年(一九一一年)の駆逐艦「山風」進水の頃には「立神の丘上は老若男女山の如く密集」⁴¹していた。ここは切り立った崖であるため、大正二年の巡洋戦艦「霧島」進水式では、三菱長崎が「数百間の竹矢来」を設置した上で、市内官公私立の各学校生徒数千人と造船所職工及びその家族が観覧した。以後も西立神の崖は、「当日第一の拝観場所」として進水式では必ず人垣が出来る予備拝観席のような場所となつて

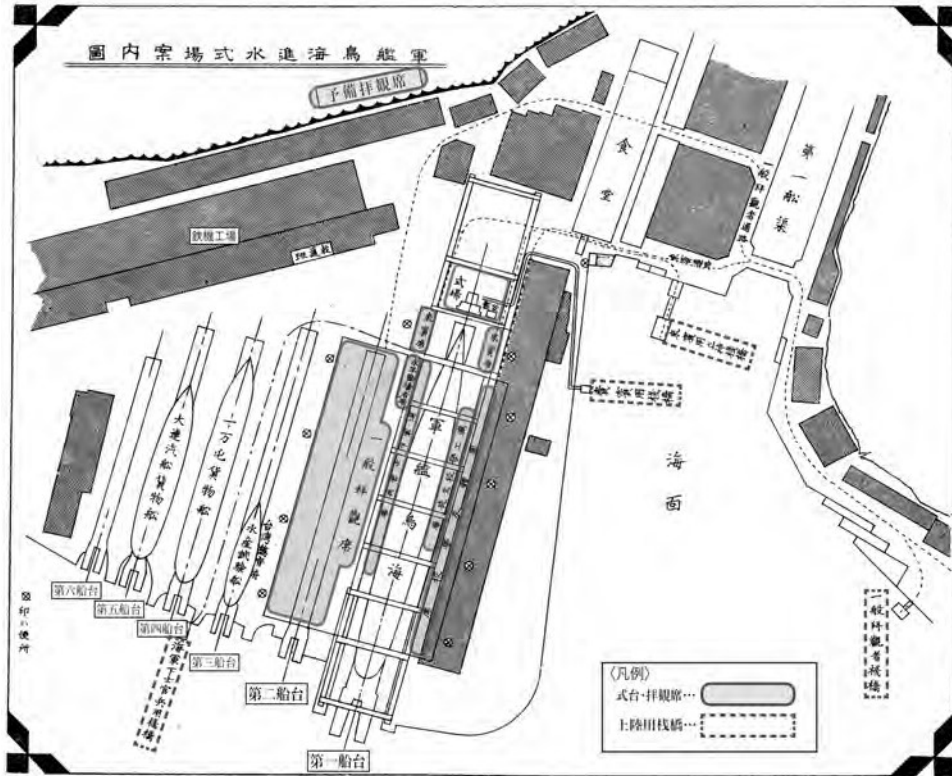
いる。⁴²三菱長崎の職工が多く居住した立神・鮑の浦・水の浦・稲佐方面では、前述のように各職工が進水式観覧のために家族だけでなく遠方の親戚まで呼び寄せており、大正六年の戦艦「日向」進水の際には「頗ぶるの大混雑で、床屋、女髪結、湯屋等は何れも徹夜し、下駄店などは殆んど売切れの好景況」という賑わいを見た。⁴³

②金刀比羅神社・鍋冠山・南山手

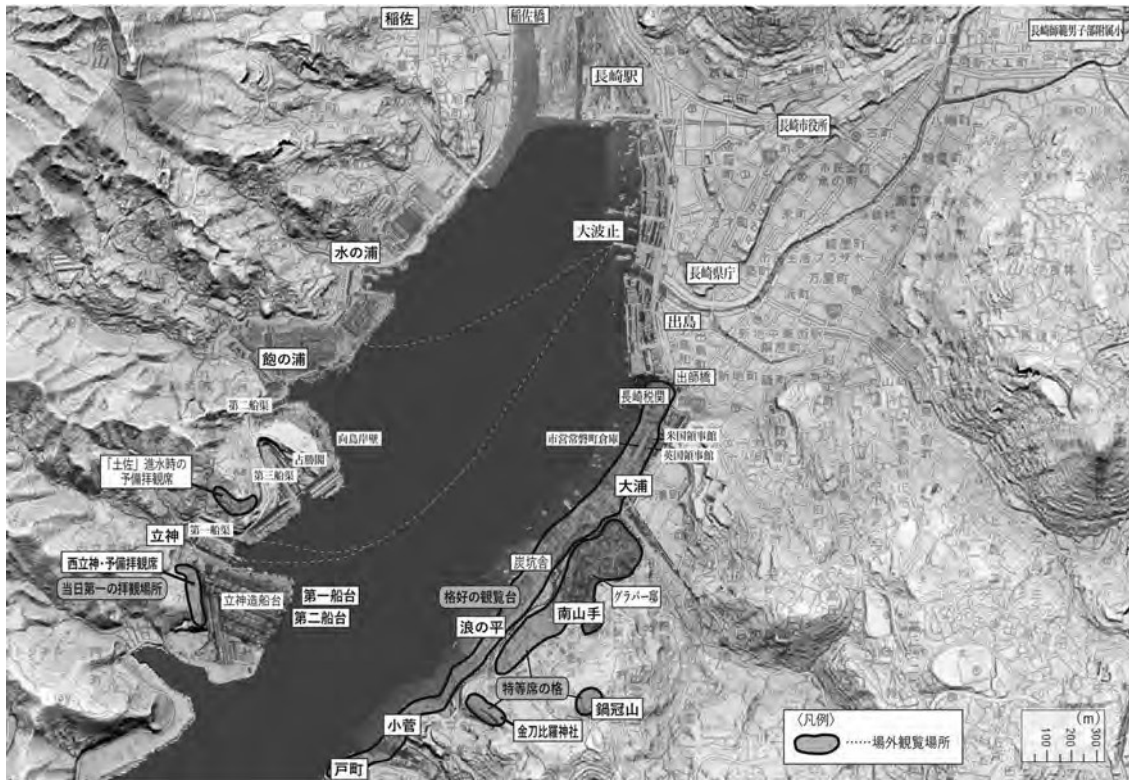
立神地区のちよほど対岸山手にあたる南山手や金刀比羅(琴平)神社(現・東琴平一丁目)は、船台を見下ろすことができるため、「劇場でいふたら特等席の格」⁴⁴とみなされた。金刀比羅神社境内は、地形も比較的安全なことから各学校生徒が多数詰め掛けた。大正二年の「霧島」進水時には朝六時頃から陣取りが始まり、「恰(まる)で人の鈴生(すずなり)」⁴⁵、四年後の「日向」進水時には「人の面(おもて)で毛氈(もうせん)を敷いたも同然」と表現されるほどの大混雑となった。⁴⁶観覧者のなかには更なる眺望を求めて高台の鍋冠山へ望遠鏡を手に登山する者もあり、旧外国人居留地の南山手に林立する洋館群では、親族・知人等と呼び寄せて悠々と「居ながら拝観」⁴⁷ができたため、観覧場所探しをする人々の羨望の的となつていたという。

③大浦・浪の平・小菅海岸

造船所対岸の海岸通り、大浦・浪の平・小菅から戸町にかけても「恰好の観覧台」として午前七、八時頃には至る所「一面の黒山」⁴⁸が築かれた。常盤町の長崎税関待合所や小菅根町の炭坑舎(三菱高島炭坑長崎事務所)でも「弥次連が我は顔に占領して押すな押すな騒ぎ」⁴⁹で、沿岸民家の屋根や木に登る人の姿があり、「霧島」進水時には、出師橋(現・ながさき出島道路起点)近くに繫留中の住吉丸ほか帆船の乗組員多数が帆柱の上から進水を観覧する光景まで見られた。⁴⁹「日向」進水の頃には、大正四年開業の路面電車も観覧場所への移動手段とし



【図1】軍艦「烏海」進水式場案内図（昭和6年4月5日）（齋藤歳）
備考：式台・拝観席および上陸用栈橋について一部加筆



【図2】三菱長崎造船所周辺の進水式場外観覧場所
備考：カシミール3D、国土地理院地図に米国立公文書館空中写真（原爆投下前 1945.08.07 米軍撮影）を一部貼付して作成

て使用された。大浦行きは電車は「鈴生（すずなり）の有様」で開業以来の大盛況。満員電車から「蜘蛛の子を散らすが如く」吐き出された観覧者たちは思い思いの箇所に入り出し、その合間を自転車や人力車が駆け抜けた。当時の海岸通りの状況について新聞曰く「実に芋を洗ふやうの大混雑」であったと表現している。⁵⁰

④長崎港内海上

陸上からでは満足できない人々は観覧場所を海上に求め、客船・通船には客が殺到してたちまち満員となった。大正二年の「霧島」進水時には、船が出払うなか、一人一〇銭だった乗船料は二〇銭、五〇銭と便乗値上げされ、各船とも定員超過となり、ついには営業免許を持たないにわか客船商売まで登場した。長崎港内の客船業者は大繁盛で、「船頭連はホクホクもの」であったという。⁵¹ 大正六年の「日向」進水時にも観覧者を乗せた小型船や客船が一面に並ぶ「木の葉を浮かべたやう」な光景が港内に広がった。サンパン（小型通船）やボートを雇う観覧者の姿は、昭和六年の一等巡洋艦「鳥海」進水の際にも見られた。⁵²

このように観覧場所確保に奔走した人々も式典終了後は「一様に安心したやうな様子」となって、足早に家路につく人々のほか、その足で電気館や喜楽館といった映画館の「活動見物」に流れていく面々も多数あったようである。⁵³

四 催事として発展する進水式

(一) 航空隊演舞飛行

船台進水は、観覧者が早朝から式場の内外で待ち構え、式本番までの待ち時間が長い割に、最大の見せ場はわずか一分間弱程度で終わってしまう。そのため三菱長崎では、式場内を盛り上げる付帯イベント

として、航空機による演舞飛行が増えていった。

わが国の艦艇進水式における演舞飛行は、横須賀工廠での大正元年（一九一三）の巡洋戦艦「比叡」進水式が初見である。⁵⁴ ただし、大正九年一二月の佐世保海軍航空隊開隊、一一年（一九二二）一二月の大村海軍航空隊開隊以後、演舞飛行の回数は三菱長崎のほうが上回り、横須賀の三回に対して長崎では少なくとも七回の実施を確認できる（優秀船舶建造助成施設）の貨客船「浅間丸」「龍田丸」を含めると九回）。

長崎での初登場は大正

一〇年の戦艦「土佐」進水式のときで、佐世保から飛来した二機が旋回飛行をする程度であった。そこから空の演目は急速に進化する。大正一二年（一九二三）の二等巡洋艦「川内」進水式では、大村航空隊の二機が進水直前の「川内」上空にて「大円周を描き、宙返りの妙技」を演じ、翌一三年（一九二四）の潜水母艦「長鯨」進水式の際には、進水直後の「長鯨」を中心に三機が「旋回飛行をなし、横転逆転、木の葉落し、宙返り」というアクロバット飛行を行い、場内観覧席から



【写真5】第2船台から進水した直後の貨客船「龍田丸」昭和4年4月12日（齋藤蔵）
写真左端には対岸の浪の平が迫る

は「破るるが如き拍手」が送られたという。進水式のために大村から飛来する機数は次第に増え、昭和一二年の二等巡洋艦「利根」進水式では、十数機もの航空機が長崎港上空で祝賀飛行を行うまでになる。⁵⁵進水式に花を添える航空隊の演舞飛行は、盛り上げ役として質・量とも充実していったのである。

このほか、大正一五年（一九二六）の一等巡洋艦「青葉」進水式では、式典終了後の海軍主催イベントとして、長崎市内の中学校・女学校生徒、少年団員や実業学校生徒など二六三一人を「加古」「古鷹」「川内」「由良」の巡洋艦四艦に分乗させて佐世保へ向かう体験航海が実施されている。⁵⁶

「くんち」に慣れ親しんだ長崎市民の（お祭り）を観る眼はそれなりに厳しい。そのため、三菱長崎の艦艇進水式は、そのお眼鏡に適うべく独特の発展を見せたのではないかと思われる。

（二）ラジオからも拡がる進水式

放送メディアが発達すると、進水式の模様は、新聞だけでなくラジオを通じて各家庭に伝えられるようになっていく。長崎では、昭和八年（一九三三）九月に長崎放送局（J O A G ラジオ第一）が開局した。その翌年五月三十一日付『長崎日日新聞』ラジオ番組欄には、午前八時四〇分から「軍艦三隈進水実況（長崎三菱造船所より中継）」の記載を確認できる。⁵⁷当日、日本放送協会は第一船台を中心とした式場内と儀礼艦として長崎港内に停泊する巡洋艦「龍田」艦上の二カ所にマイクを設置し、「三隈」進水の模様を全国に実況中継していた。「三隈」はロンドン軍縮会議の制限下で計画された八五〇〇トン級の巡洋艦で、計画四艦のうち三艦を三菱長崎が建造している。

わが国初の進水式ラジオ中継は、昭和八年十一月の横須賀工廠の潜水母艦「大鯨」進水式であった。⁵⁸この進水式は天皇行幸が予定され（実際は中止）、観覧者総数一五万とも二〇万とも報じられた盛大なものであった。それから

わすか半年後に九州の長崎からも進水式の全国中継が行われたのである。⁶⁰日本放送協会は「三隈」進水実況放送について「海軍軍思想鼓吹ノ目的」を名目に申請している。海軍省はこれを「機密保持上支障ナキ範囲」において「出来得ル限り便宜供与方取計相成度」と前向きな姿勢で許可し、実況放送が実現した。⁶¹三菱長崎では、昭和一三年（一九三八）にも二等巡洋艦「筑摩」進水式のラジオ実況中継が行われている。

ラジオ放送による進水式の実況中継は、新たな放送素材を求める放送局側、進水式の公開を軍事宣伝普及の一環として着目する海軍、式の広報宣伝効果に期待する造船所、そして進水式を現地まで観に行くことがかなわないラジオの聴衆、それぞれの思惑が上手く合致したことで実現したと思われる。長崎の艦艇進水式の賑わいは、ラジオという放送メディアの登場によって全国各地に拡散していったのである。



【写真6】進水した一等巡洋艦「羽黒」昭和3年3月24日（齋藤蔵）

五 非公開となつていく進水式

(一) 市民生活からの隔離

三菱長崎造船所の艦艇建造は、日清・日露戦争期の海軍艦艇受注に始まる。大正から昭和一〇年代前半まで各種艦艇を次々と建造・進水させていくにつれ、進水式の観覧者数は増加し、催事内容も充実していった。ところが、内外の情勢変化とともに進水式も様相が一変する。昭和一二年七月の盧溝橋事件後に日中間の軍事紛争が全面戦争の様相を帯び、翌一三年四月、国家総動員法公布による本格的戦時体制が確立すると、同年一〇月一七日には「進水時ニ於テハ其ノ艦種艦名ノ外一切公表セザルモノ」(軍務一機密第三七〇号)⁶²とされ、艦艇進水式は非公開、新聞紙面では艦名が公表されるだけとなった。さらに太平洋戦争突入の可能性が濃厚となつてきた昭和一五年(一九四〇)一月二一日、「自今新造艦艇、特務艦艇進水ノ公表ハ行ハザルコトニ定メラレ候」(軍務一機密第七五四号)⁶³と、進水自体が秘匿対象となる。「長崎市空前の盛儀」となり、「神事(くんち)以上の大騒ぎ」とも表現された長崎の艦艇進水式は、非常時の防諜対策強化によつて、市民一般の生活から切り離されたのである。

(二) 戦艦「武蔵」の進水

① 観覧特等席は監視・取締対象に

海軍軍縮条約が昭和一一年末(一九三六)を以て失効する直前の一月二六日、三菱長崎に第三次海軍軍備補充計画の「第二号艦」建造内命が届く。⁶⁴第二号艦とは日本海軍最後の超弩級戦艦「武蔵」(六五〇〇ト)のことである。「武蔵」は存在自体が最高の機密事項、軍機扱いであつたため、建造関係地域への立ち入り制限、建造現場の遮蔽、建造関係者による秘密厳守宣誓の実施など、防諜対策は、造船所内はもとよりその周辺にも及んだ。

三菱長崎では、船台対岸や背後の西立神の丘陵地帯、住宅地域を見張り、長崎港内の不審な船舶を発見するために、造船台、向島岸壁、水ノ浦海軍監督官事務所屋上に監視所を設置した。大波止発着の交通船については造船所側の窓を閉めさせ、監視員が常に乗船していた。また、地区の憲兵隊、警官などは、住宅地域、とりわけ旧外国人居留地の外国人住宅を注意箇所として厳しい監視の目を向けていた。⁶⁵かつて進水式観覧の特等席として賑わつた場所は、一転して当局の監視・取締りの対象となつたのである。

「武蔵」起工後の機密保持策のなかで、まず南山手のグラバー邸(現・重要文化財)が対象に挙がつたようである。三菱と密接な間柄にあつた所有者の倉場富三郎は、昭和一四年(一九三九)、三菱側に邸宅および周辺地所を売却している。「外ならぬ三菱さんからの頼みだし、三菱さんならきつと大切にしておるので、お譲りしたい」(富三郎夫人・ワカ談)とのことで手放された同邸は、「大浦社宅(大浦クラブ)」の名称で三菱の職員倶楽部となる。⁶⁶

同じく昭和六年に閉鎖していた香港上海銀行長崎支店(現・重要文化財)及び同行付属の英人「ハリス邸」(St. James 邸、南山手5B、現・長崎地方気象台付近)はともに海軍当局が一五年に買収し、銀行建物は長崎県に譲渡後、梅香崎警察署が移転して機密保持の拠点となり、「ハリス邸」は海軍監督官会議所として監督官、機装員、出張者等の宿泊施設となつた。⁶⁷

昭和一六年(一九四一)九月二〇日、第二号艦(「武蔵」)機装員として長崎に着任した千早正隆氏(当時少佐、「武蔵」高射長兼第五・六分隊長、のち聯合艦隊参謀)は、「武蔵」建造前の長崎訪問時に感じた華やかさがなくなり、まち全体の印象が一変していたことに驚いたという。

長崎にはビルとみなされるものは、県庁の建物と丘の上に立つ活



【写真7】昭和5年初頭の南山手および三菱長崎造船所（部分） 一部記号を加筆
 記号 A) グラバー邸、B) 香港上海銀行長崎支店、2) 立神造船台、8) 艀装中の「龍田丸」
 進水後の戦艦「武蔵」の艀装も（8）の位置で行われた。山の稜線は加工されている。
 （『三菱造船（株）長崎造船所営業案内』、1930年（齋藤蔵）より）。

水女学校ぐらゐしかなかつたが、それらの建物が黒く塗るかえられ、（略）灰黒色の印象を何よりも深めていたのは、長崎の町の対岸の岸に帯状に長くのびた三菱の造船所が、ほとんど黒一色にその姿をかえ、そのランドマークであつた造船台のガントリー・クレーンも何か黒い覆いをかけていることであつた。（略）長崎の町は灰色だなどその時感じたことを、いまによく覚えてゐる。⁶⁸

「武蔵」建造当時の長崎は、機密保持のために〈灰黒色のベール〉に包まれていたのである。

② 寂しい進水式

戦艦「武蔵」進水は、巨艦の船台進水という技術的課題と別に、いかに人目につかないように行うかという難問を抱えていた。

大浦海岸に面する英国領事館（現・重要文化財）および米領事館からは、「武蔵」建造中の船台や艀装予定岸壁がまる見えであり、防諜対策上の遮蔽について「絶体的ニソノ必要ニ迫ラレ」ていた。そこで昭和一五年六月二三日、長崎県外事課長、長崎市管轄課長が三菱長崎造船所内にて協議し、海軍からの資材提供を前提として長崎市が遮蔽用の市営倉庫（のちの「長崎市管轄盤町倉庫」、通称「目隠し倉庫」）を建設することで決着した。海軍指定の期日は間近に迫っていたため突貫工事となり、進水前日の一〇月三十一日、海沿い埋立工事は建物周囲のみ、「大部ノ屋根及海岸ノ側壁ヲ展張」したハリボテ状態で米英領事館からの進水状況〈目隠し〉にこぎつけている。⁶⁹

そして一五年十一月一日、長崎市内は朝から防空演習が行われ、憲兵・警察署員約六〇〇名が佐世保鎮守府からの進水時警戒隊約一二〇〇名とともに造船所周辺の海岸、山地、市内の警戒配備に就いていた。市内要所の交通は遮断、港内への船舶入港も一切禁止され、

海上には警備船が配置されていた。⁷⁰進水時の煙幕展開も検討され、実験の末、「風向ニヨリテハ（伏見宮博恭王が臨席の）進水式場ニ煙ガ流レ込ミ畏イ事ヲ惹起スル懸念」、「進水等ヲ予告スルコトニナル」などの理由により不採用となっていたが、当日朝は霧が発生しており、天然の煙幕となっていた。⁷¹

厳戒態勢下の午前八時三〇分、海軍大臣による進水命令書朗読で第二号艦が「武蔵」と命名されると、五三分、造船所長が支綱を切断し、満艦飾なし、軍楽隊の「軍艦マーチ」もなく、薬玉が割られただけの「武蔵」は、八時五五分、長崎港の海面にその巨軀を浮かべた。

世界最大の戦艦「武蔵」の進水式は、平時であれば万を超す観覧者に沸いたであろうが、一般の拝観は許されず、進水作業係員のほかは式台に参列者わずか三〇名足らずという寂しいものとなった。

（三）戦時下の進水式と戦後

太平洋戦争下の艦艇進水式は原則、非公表であった。しかし昭和一九年（一九四四）一月一日に三菱長崎の立神工場で進水した第八号海防艦など「報国」を冠した三艦は特例的に新聞等で報道された。同艦は前から展開された建艦献金運動の資金が建造費の一部に充当されていた。進水当日の『長崎日報』夕刊では、「颯爽我らが赤誠海防艦」「新鋭海の尖兵 報国第三号 一億熱血染めけさ進水」と題して、艦名を非公式な「報国第三号海防艦」とし、建造所は「〇〇造船所」と伏せつつ、進水の模様を写真付きで詳しく伝えている。⁷²これは建艦献金の成果報告と生産意欲昂揚を兼ねた記事で、別枠には献金に対する小松輝久佐世保鎮守府司令長官からの謝辞も綴られている。

戦時下の三菱長崎における艦艇進水の防諜管理は、「武蔵」ほど極端ではなく、市内で遠目から様子を見ることができた。長崎師範学校男子部附属国民学校（現・長崎市立桜馬場中学校所在地）に通学していた浅野雅彦氏は、当時の目撃状況を次のように回想している。

私達の小学校は旧市内の「城の古跡」という丘陵地にあつて、造船所ガントリークレーンまで三キロ程しかないので、教室特に音楽教室からは良く見えた。進水式は午前中に挙行することが多く、戦時中には式の前に煙幕を張り、しばらくしてその上（ガントリークレーン上……筆者補注）に日章旗と軍艦旗が翻るので、今日は軍艦だと直ぐ分かった。⁷³

平時には長崎のまち全体を巻き込んで（お祭り）のような盛り上がりを見せた艦艇進水式は、準戦時体制、戦時下には機密保持のために、一部の例外を除いて市民が見てはならないもの、知らずともよいものとされた。この時期の海軍艦艇進水式は、市民生活も圧迫する存在に変質していたのである。

夜を日に継いだ艦艇の急速多量建造も戦局の打開には至らず、三菱長崎造船所は、昭和一九年八月一日、昭和二〇年七月二九日、三十一日、八月一日と五次にわたる空襲を受け、八月九日の原子爆弾投下により人・物の両面で甚大な損害を蒙り、生産は全面停止、終戦を迎えた。⁷⁴

操業再開後の三菱長崎における戦後初の進水は、二〇年一〇月二五日の貨物船「辰清丸」（二八六四ト）であった。⁷⁵以後、同所は軍需中心から民間産業への転換を図るなかで世界的な造船需要の波に乗り、昭和三一年（一九五六）および四〇（五一年）（一九六五（七六））、単一造船所としての進水量世界一の金字塔を連続して打ち立てる。⁷⁶三菱長崎が造船事業をもって長崎の戦後復興と経済成長の立役者となるなか、船の誕生を象徴する進水式の賑わいもまた日常の光景として長崎市民のもとに戻って来たのであった。

おわりに

本稿では、軍事イベントである海軍艦艇の進水式を地域の視座で位置づける作業の一環として、長崎県長崎市の三菱長崎造船所を対象に、進水式当日の長崎の様相を明らかにすべく論を進めてきた。

このなかで、明治後期から昭和戦前期にかけての三菱長崎における艦艇進水式の特徴、進水式当日の長崎市内の諸相、催事として変化する進水式、非常時・戦時下の進水式などについて触れた。

長崎の市民や周辺地域の人々は、話題性のある巨艦・主力艦の進水式ともなると、その観覧場所を求めて奔走した。この種の艦艇進水式の日の長崎は、三菱長崎造船所の立神船台を舞台に、対岸や周囲の高台などがそのまま場外観覧席となり、そこに万を超す人々が黒山を築いた。長崎港内の一角が巨大な劇場となっていたのである。こうした進水式が有する広報宣伝力への期待は大きく、スペイン風邪が猛威を振るっていた時期に三菱が各方面と調整し、式典を敢行したことにも現れている。

長崎における艦艇進水式の特徴としては三点ほど挙げられる。第一は、新造艦の進水であっても中小規模艦では長崎の人々の反応が鈍かったこと。第二に三菱長崎の設定した進水日が「くんち」の三日間以外であったこと。第三に式典来賓中の外国人の多さである。特に第一・第二点目は、長崎の人々の〈お祭り〉基準の高さと「くんち」が長崎の〈お祭り〉における頂点であったことを窺わせる。これらが影響していたのか、三菱長崎の艦艇進水式は、航空隊演舞飛行が恒例となるなど、催事として独特の発展を遂げている。ラジオの全国実況中継も加わり、その盛り上がりは、「長崎市空前の盛儀」、長崎随一の行事である「くんち」を凌ぐと表現されることもあった。

ところが、非常時、太平洋戦争開戦を控えた頃には進水式は非公表とされ、市民生活と切り離されたことで進水式から〈お祭り〉色が消

え失せる。かつて場外観覧席として賑わった一帯は、一転して当局の監視・取締りの対象となり、艦艇進水式は、市民の生活すらも圧迫する存在に変貌してしまふ。長崎の進水式に再び市民の歓声が戻るのは、戦後復興の造船ブームの頃であった。

今回の考察では、艦艇進水式の日の長崎市の概況把握を優先したため、天皇名代として進水式に差遣された皇族の奉迎態勢やそこに見える地元行政などの期待については記述を割愛した。また、同じ長崎県内の軍港都市佐世保における進水式については、紙幅の関係上触れることができなかった。これらについては別稿にて紹介することとした。

(長崎県文化振興課係長(学芸員))

- 1 日本海軍では、明治一〇年代までは、進水について「水卸」「舟卸（船卸）」の表現を公文書に用いていた。式典としての進水式は、大正三年一〇月一二日の改正「軍艦進水規則」（達第一五〇号）をもって法令上は「命名式」と換言されているが実際には混用されており、本稿では「進水式」の表現で通すこととした。
- 2 乾ドックでの浮上進水は、当初、明治一九年三月の「新造艦命名式」（要第一〇二号）では、ドック注水から船体浮揚までとされていた。
- 3 日本中小型造船工業会では、「この地球で一番大きな工業製品『船』を見に行こう!!」（日本財団、海と日本プロジェクト二〇二〇）と題して次世代の海事産業を担う小中学生を対象に全国の造船所・船用事業所見学会を二〇一八年から実施している。
- 4 前掲注（一）「軍艦進水規則」第八条第二項（大正三年二月二五日、達第一九号）。
- 5 齋藤義朗「進水式の日の横須賀―進水気分で賑ふ軍港市―」（『海軍史研究』七五号、二〇一八年）。海軍施設観覧の関連規程としては、「軍港並海軍所属工場観覧許可券二関スル規程」（明治三二年九月一五日、官房第四〇一七号）、大正二二年（一九二三）二月一九日から「海軍観覧規程」（官房機密第二〇二号）が基本となっており、昭和一〇年（一九三五）には全国統計で軍港観覧者総数は百万人を超す規模となっていた（齋藤義朗「昭和の子どもたちの軍港見学」、『昭和のくらし研究』一二号、二〇一四年）。なお、進水式の部外公開要領については、その都度、各鎮守府から「進水式当日一般心得」「観覧者一般心得」などが告示されていた。
- 6 戦艦クラスの巨艦となると、長崎の例だけでも支綱切断から艦が滑り出すまでに数分を要する場合がしばしば見られる【表一】。
- 7 齋藤義朗「軍港呉と進水式―昭和戦前期の臨時イベント―」（『軍港都市史研究Ⅲ呉編』、二〇一四年、清文堂、一三三三―一三三八頁）、前掲注（五）齋藤「進水式の日の横須賀」。
- 8 海軍からの建造割り当て艦種として、三菱長崎では、戦艦・巡洋艦。同じく民間の川崎造船所（兵庫県神戸市）では、大正期には主力艦を建造し、航空母艦・巡洋艦・潜水艦が割り当てられていた。また、三菱長崎造船所の呼称については、幕末の長崎鑛鉄所に始まる工部省長崎造船局を明治一七年（一八八四）七月、三菱会社が事業継承し三菱会社長崎造船所となつて以降、同所は三菱会社三菱造船所（一八八八年十二月）、三菱合資会社三菱造船所（一八九三年十二月）、三菱合資会社長崎造船所（一九一五年一〇月）、三菱造船株式会社長崎造船所（一九一七年一月）、三菱重工株式会社（一九三四年四月）と名称が変遷している。本稿では混乱を避けるため、便宜的に「三菱長崎造船所」で表記を統一したい。
- 9 かつて筆者は、長崎や佐世保の進水式の様相についてごく簡単に紹介したことがある（齋藤「進水式の日の長崎・佐世保―明治・大正・昭和戦前期―」〈『ながさきの空 第二八集』、二〇一七年、九―一〇頁〉。本稿は、対象地域を長崎に絞り、考察し直したものである。
- 10 『長崎県史 近代編』、一九七六年、七六九―七七〇、九〇九―九一〇頁。『図説 長崎県の歴史』、一九九六年、河出書房新社、二二〇―二二二頁。
- 11 明治三二年（一八九九）に三菱長崎で進水した水雷艇「白鷹」（一二〇ト）、「第三十七・三十八号水雷艇」（八二ト）は、ドイツ・シーヒャウ社で建造したものを輸入し、長崎で組み立て進水させたもの。
- 12 三菱長崎における海軍からの受注・進水第一号は、明治三二年の第三十七号水雷艇（八二ト）だが、ドイツのシーヒャウ社建造品の輸入・組み立てで、初の建造艦艇進水は、三等駆逐艦「白露」（三八一ト）である。

- 13 「駆逐艦進水式」『東京朝日新聞』東京版、明治三十九年（一九〇六）二月一三日。
- 14 三等駆逐艦「水無月」「松風」など。『鎮西日報』明治三十九年（一九〇六）一月六日。同一二月二五日。
- 15 「霧島無事進水」九州日之出新聞』大正二年（一九一三）二月二日。
- 16 「霧島進水式彙報」九州日之出新聞』大正二年（一九一三）一月三〇日。
- 17 「土佐」以前の三菱長崎の式場内席等級は、巡洋戦艦「霧島」（大正二）で招待状・青券。戦艦「日向」（大正六）、二等巡洋艦「多摩」（大正九）で招待状・青券・赤券の設定があった。「進水式参列者注意」『長崎新聞』大正二年（一九一三）一月二八日、「式場の光景」同、大正六年（一九一七）一月二八日、「進水式拝観注意」『東洋日の出新聞』大正九年（一九二〇）二月八日。
- 18 前掲注（7）齋藤「軍港呉と進水式」、前掲注（5）齋藤「進水式の日の横須賀」。
- 19 「軍艦鳥海進水ノ件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C05022065900（第九画像）、公文備考 F 卷一 船艦 海軍大臣官房記録 昭和七（防衛省防衛研究所）。なお、その日の吉兆や運勢を判断する暦注の一つ、六曜（大安、赤口、先勝、友引、先負、仏滅）は、【表1】を見る限り関連性が認められない。
- 20 「長崎」〈*名所案内〉、一九二〇年三月、門司鉄道局。『長崎遊覧之葉』、一九二〇年二月、長崎市役所。
- 21 前掲注（20）『長崎遊覧之葉』。
- 22 昭和三年（一九二八）進水の巡洋艦「羽黒」では三五名、昭和六年（一九三二）進水の巡洋艦「鳥海」で二三名、昭和九年（一九三四）進水の巡洋艦「三隈」では二四名の外国人が招待され、観覧した記録が海軍省『公文備考』に残されている。
- 23 「海軍観覧規程」（大正一二年二月一九日、官房機密第二〇二号）、海軍省『海軍制度沿革 卷十一（一）』、一九七二年、原書房、一一一九～一一二二頁。「海軍関係民間工場観覧ニ関スル件」（昭和三年七月二〇日、官房機密 〇九一号）、同前、一一二二頁。
- 24 「外国武官視察ノ件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C1108033900（第二画像）、外国大公使館附海軍武官往復文書（英米仏伊露西班牙雜）大正一〇年（防衛省防衛研究所）。
- 25 「進水又ハ命名式」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C051059700（第五画像）、公文備考 昭和一二年 C 儀制卷三（防衛省防衛研究所）。
- 26 「軍艦多摩命名進水式」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C08021548500（第一〇画像）、大正九年 公文備考 卷一七 儀制九止（防衛省防衛研究所）。
- 27 「一月中の図書館」『東洋日の出新聞』大正九年（一九二〇）二月七日。『図書館開館』同、二月六日。
- 28 海軍の艦船、機関など航空機以外の諸兵器に関する技術行政を司った部署。
- 29 「鮑ノ浦病院取扱患者数ニ係ル件」「長崎造船所衛生状態報告」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C08021548600（第一四一六画像）、大正九年 公文備考 卷一七 儀制九止（防衛省防衛研究所）、「および「鮑ノ浦病院流感ニ係ル件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C08021632900（第四画像）、大正九年 公文備考 卷六九 人事四止 医事一（防衛省防衛研究所）」。
- 30 「伝染病」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C08021632900（第一二二画像）、大正九年 公文備考 卷六九 人事四止 医事一（防衛省防衛研究所）。
- 31 「陸上の拝観者」九州日之出新聞』大正二年（一九一三）二月二日。

32 前掲注(31) 記事。

33 「昨日誕生した軍艦日向」『東洋日の出新聞』大正六年(一九一七)一月二八日。

34 前掲注(33) 記事。

35 「進水式参列の顯官学者実業家」『長崎日日新聞』昭和六年(一九三一)四月四日(夕刊)一面。なお、長崎市内の旅客収容能力について昭和九年(一九三四)二月現在で全等級を合せると一〇七館、九七二室、六七六〇畳であった(『長崎旅館一覽表』、昭和九年二月、長崎旅館組合、齋藤蔵)

36 「日向進水式」『東洋日の出新聞』大正六年(一九一七)一月二八日。

37 「小学生の奉迎と拝観」『東洋日の出新聞』大正六年(一九一七)一月二四日。ほか「利根の進水式」『長崎日日新聞』昭和二年

(一九三七)一月二〇日、「二等巡洋艦 筑摩 けふ晴れの進水」

『長崎日日新聞』昭和三年(一九三八)三月一九日(夕刊)など。

38 「日向の進水式」『九州日之出新聞』大正六年(一九一七)一月二八日。

39 前掲注(36) 記事。

40 前掲注(36) 記事。

41 「山風進水式」『長崎新聞』明治四四年(一九一一)一月二二日。

42 「壯観を極めし式場」『長崎新聞』大正二年(一九一三)二月二日。

「陸上の拝観者」『九州日之出新聞』大正二年(一九一三)二月二日。ほか「母艦」長鯨の進水式『東洋日の出新聞』大正一三年(一九二四)三月二五日。「銀斧春陽に閃きて鳥海は徐に船台を迂る」『長崎日日

新聞』昭和六年(一九三一)四月六日など。

43 「神事以上の大騒」『東洋日の出新聞』大正六年(一九一七)一月

二八日。

44 前掲注(33) 記事。

45 「金毘羅山の鈴生」『東洋日の出新聞』大正二年(一九一三)一二

月二日。

46 前掲注(33) 記事。

47 前掲注(33) 記事。

48 前掲注(33) 記事。

49 前掲注(45) 記事。

50 前掲注(33) 記事。

51 「客船の総仕舞」『東洋日の出新聞』大正二年(一九一三)二月二日。

「通船の大繁盛」『九州日之出新聞』大正二年二月二日。

52 「海岸一帯は人の黒山」『長崎日日新聞』昭和六年(一九三一)四

月六日。

53 「寒風粉雪裡に雄姿堂々軍艦多摩の進水」『東洋日の出新聞』大正

九年(一九二〇)二月一日。

54 「天覧飛行」『横浜貿易新報』大正元年(一九一一)一月二一日。

55 「聽て廃棄さる、巨艦」土佐進水式終了『東京朝日新聞』大正

一〇年(一九二二)二月一九日(大阪版)、「巡洋艦」川内進水式

『東洋日の出新聞』大正一二年(一九二三)一〇月三一日。「母艦」長

鯨進水式同、一三年(一九二四)三月二五日。「利根の進水式」

『長崎日日新聞』昭和二年(一九三七)一月二〇日。

56 「佐世保まで軍艦に便乗見学」『長崎日日新聞』大正一五年(一九二六)

二月一日。

57 「J.O.A.G.卅一日のプロ」『長崎日日新聞』昭和九年(一九三四)

五月三〇日(夕刊)。

58 「新鋭」三隈進水式実況式場及儀礼艦龍田艦上より『長崎日日

新聞』昭和九年(一九三四)五月三〇日(夕刊)。

59 「大鯨」進水の実況をAKより全国へ中継放送進水式のラヂオ

放送は我国で最初『横浜貿易新報』昭和八年(一九三三)一月

八日。「大鯨」進水式中継放送に関する件(一)「JACAR(アジ

ア歴史資料センター) Ref.C05022666400 (第一〜三画像)、公文備考昭和八年 C 儀制卷七 (防衛省防衛研究所)。当初、新聞報道では、昭和二年の「妙高」進水式実況を横須賀から東京・愛宕山まで有線で接続し、ラジオ中継する旨が報じられていたが、回線系統の都合から中止となり、放送は実現しなかった。『東京朝日新聞』昭和二年(一九二七)四月一三日夕刊。

⁶⁰ 三菱長崎における「三隈」進水のラジオ中継は、昭和九年(一九三四)三月の呉海軍工廠での二等巡洋艦「最上」進水式中継に続いて全国第三例目となる。

⁶¹ 「軍艦三隈進水放送許可ノ件」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C05023428600 (第一・一二画像)、「軍艦三隈進水放送願」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C05023428700 (第一画像)、「公文備考昭和九年 C 儀制卷五 (防衛省防衛研究所)。

⁶² 「新造艦艇特務艦艇要目公表ニ関スル件申進」(軍務一機密第三七〇号)、内令提要卷二上、海軍省大臣官房、一九三六年。

⁶³ 前掲注(62)書。

⁶⁴ 古賀繁一『古い思い出』、一九九二年、私家版、三八〜三九頁、七七〜七九頁。

⁶⁵ 牧野茂・古賀繁一『戦艦武蔵建造記録』、一九七七年、アテネ書房、七七頁。『三菱長崎造船所史(統編)』、一九五一年、二二二頁。齋藤義朗「戦艦『武蔵』建造と長崎・佐世保」(共著『戦艦『武蔵』の真実』、二〇一五年、学研パブリッシング、九七〜九九頁)。

⁶⁶ 前掲注(65)『戦艦武蔵建造記録』七七頁。及び同書(第二刷)正誤表(長崎造船所史料館、二〇〇〇年一月八日作成。経済理由讓渡ではなく、ワカ夫人の談話に差替え、グラバー邸は海軍監督官集会所ではなく、社員クラブ「大浦社宅」になったと修正)。岩波寿喜「グラバーさんを思う」には、日中間の軍事紛争が全面戦争に拡

大して間もない頃、ワカ夫人が家族同様の付き合いであった岩波氏に「実は三菱の岩崎さんから『グラバー邸を譲って欲しい』との話があっている。今の庭園は広すぎるし、邸内に三組もの夫婦も居る。外ならぬ三菱さんからの頼みだし、三菱さんならきつと大切にしておさると思うので、お譲りしたい」と語っていたことが掲載されている(『原爆前後56』、一九八四年、思い出集世話人、七六〜七七頁)。

⁶⁷ 『創業百年の長崎造船所』、一九五七年、三菱造船株式会社、四九三〜四九四頁。ブライアン・バークガフニ『写真でたどる旧グラバー住宅の歴史』、二〇二〇年、フライング・クレイン・プレス、四〇頁。『軍艦建造事情記(仮称)』五〇〜五一頁(前掲注(64)書、四一七〜四七〇頁に一部再掲)。これまで詳細不明であった「ハリス邸」が「南山手5B」の「SjHalse邸」であったことは、ブライアン・バークガフニ氏(長崎総合科学大学教授)からの『英国領事館記録』(一九三二)に基づく御教示による。

⁶⁸ 千早正隆「戦艦武蔵の艤装」(『原爆前後41』、一九七九年、思い出集世話人、四頁)。千早氏は、「武蔵」艤装員時代、旧「ハリス邸」から三菱長崎へ通勤していた。

⁶⁹ 前掲注(67)書、五一〜五三頁。

⁷⁰ 前掲注(65)『戦艦武蔵建造記録』一〇三頁、『三菱長崎造船所史(統編)』二二二頁。

⁷¹ 前掲注(67)書、三三、五四〜五五頁。金丸平蔵「三菱学校の思い出」(『回想の百年中』、一九七五年、三菱重工業株式会社長崎造船所、四〇二〜四〇三頁)。

⁷² 『長崎日報』昭和一九年(一九四四)一月一日(夕刊)。ほかに『報国海防艦相次いで浮ぶ 長崎で第三号進水』『東京朝日新聞』昭和一九年(一九四四)一月一日(夕刊)。建艦献金が充当された報国第一号(第一号海防艦)、同第二号(第五号海防艦)、同第三号(第

八号海防艦)はすべて新聞で進水が公表されており、三菱神戸造船所で建造された報国第一号については、日本ニュース第一八八号(昭和一九年一月六日)にてニュース映画として各地の映画館で公開されている。

⁷³ 浅野雅彦「浅野家のこと」(早稲田大学第一理工学部建築学科卒業同期生同人誌『ピロティ』、二〇〇五年九月、六一～六六頁)、及び浅野雅彦氏からの御教示による。

⁷⁴ 前掲注(65)『三菱長崎造船所史(続編)』一二二～一二七頁。

⁷⁵ 前掲注(66)『創業百年の長崎造船所』三三四、五六八～五六九頁。戦後初の艦艇受注と進水は、防衛庁昭和二八年度建造計画における甲型警備艦「はるかぜ」(二七〇〇ト)で、昭和三〇年(一九五五)九月二〇日に進水している。同書、三六五頁。

⁷⁶ 前掲注(10)『図説長崎県の歴史』二三五～二三六頁。